

## JACET 関西支部 2003 年度秋季大会 ワークショップ・研究発表・実践報告・シンポジウム要旨

### ワークショップ

#### 英語学習にまつわる OPTIMISM を斬る：第二言語習得研究からの提言

( 関西支部 SLA 研究会企画 )

「『量』を度外視した研究と施策のもたらすもの」	司会兼発表者：羽藤 由美
「留学に対する期待と現実」	発表者：河野 淳子
「“バイリンガル”も楽じゃない：憧れられる側の実状」	発表者：水口 香
「幼児英語教育への過剰期待：教員養成の現場より」	発表者：伊藤 紀美江
「小学校英語の行き着く先：OPTIMISM の危険性」	発表者：尾島 真奈美

情報や産業の国際化、教育制度全般の見直しなどの波を受け、前途をふさいでいた大きな岩が動き始めた感のある日本の英語教育。この岩を動かすために努力してきた私達だが、今の流れをさらに後押しすることだけが、これからの使命ではないはずだ。この流れが将来、確実な成果を生み出すよう（一時だけ盛り上がり、結局は元の状態より悪くなった「バブル経済」の二の舞とならぬよう）、掲げられた目標の妥当性を検証したり、目標達成の難しさをアピールしたりするのも、第二言語習得を研究する者の重要な務めであろう。このような観点から、当ワークショップでは、昨今の「英語熱」に煽られ、巷に溢れるようになった英語学習にまつわる OPTIMISM を、これまでの第二言語習得研究に照らし合わせて批判的に検証する。

まず羽藤が、現在、研究と施策の両方において、教授法や教師の力量など「質」に関わる議論が先行し、その前提となるべき「量（時間、資金など）」に対する配慮が蔑ろにされがちであることを指摘する。そしてこのような傾向が、誰もが容易に「英語を使える日本人」になれるかのような OPTIMISM を引き起こしつつあると分析する。その後は、個別の OPTIMISM の例を取り上げる。河野は、英国に留学した日本人を対象に行ったインタビュー調査を基に、学習者が留学に対して抱く期待とその現実について考える。水口は、多くの英語学習者の憧れの的となっている“バイリンガル”と呼ばれる生徒達の悩みや戸惑いを紹介し、世間が抱くイメージとその実状には大きな隔たりがあることを指摘する。伊藤は、幼児英語教育の可能性を考える際、「どう教えるか」だけでなく、「誰が教えるのか」についても、現実を踏まえた議論が必要であることを強調し、教員養成の現場が抱える問題とその取り組みを紹介する。尾島は、小学校における英語教育を取り上げ、自己の確立をみない子供たちを対象とする時、「国際理解教育の一環として」という言葉の意味を、大人（社会、行政、親、教師）がもっと突き詰めて考える必要があることを強調する。

パネリストが取り上げる問題以外にも、“コミュニケーション”な教授法に対する過剰期待、資格試験への過信、理論的根拠のない how-to 本など、今の時期、巷は英語教育にまつわる OPTIMISM で溢れている。ワークショップの後半では、学習者がこれらの OPTIMISM に惑わされることなく、現実在即した目標に向かって、着実に上達できるような環境をつくる方法を、フロアーの先生方との意見交換を通して模索したい。

## 発表 第一部

### <研究発表>「I know so.の可能性」

小川 知洋

本発表の目的は、一般に容認されないとされる動詞 know と代用表現 so の結合、特に I know so.という表現が可能であることをコーパス及びインフォーマント調査によるデータを基に明らかにすることである。同時に、生起状況とその特異性を I know it.との比較から提示できればと考えている。

理論上、叙実・断定的な性質を持つ動詞 know は補文を代名詞化する it を従えることは可能だが、代用表現 so と共起できないとされている。しかしながら、コーパス及びインフォーマント調査による実証的研究で、この理論は必ずしも正しくないことがわかる。

数少ない先行研究の内、Huddleston & Pullum の *The Cambridge Grammar of the English Language*. (2002:1536)を概観すると、I know so.という表現は以下の(1)に見られるように動詞 think との対比によって生じるものであると説明がされている。

(1) A: Do you think so? B: I know so.

確かに、BNC 等のコーパス検証及びインフォーマント調査から、think との対比関係で現れる I know so.は多く、また容認度も高い。しかしながら、対比関係により生起する場合を典型とするならば、異形ともいえる例も幾つかあがる(以下の(2)(3)参照)。

(2) A: Do you know what time the concert will start? B: It's gonna start at 6.

A: Are you sure? B: I know so. [インフォーマント調査 オーストラリア人]

(3) Dad's not going, I know so, cos he's going to Holland the weekend after. [BNC]

つまり、I know so.という表現を生み出す根底には対比とは異なる条件が存在することが考えられる。生起条件に関し詳細に検証すると「話者がある事実を共感する」のに使用する I know it.に対し、I know so.は「話者自信の経験から、ある事実に対し確信を持っていることを強調する」場合に生じるものだといえる。必ずしも動詞 think との対比がなくとも生じる可能性があることを示したいと思う。

### <研究発表>「英語の to 不定詞補文、動名詞補文と動詞の関係について」 高須 みどり

現代英語における主節動詞と to 不定詞補文及び動名詞補文との関係については、これまで多くの先行研究がある。しかし動詞の補文選択について、Bolinger (1977)は、「恣意的である」という結論に達し、Declerck (1991)は「厳密な規則の提示をする事は不可能である」と述べている。

しかし、歴史的に眺めてみると、動詞によっては従属する補文が変化しているという事が起きている。現代英語において to 不定詞を従えている動詞が、過去には動名詞補文を従えていたり、またその逆の例も観察される。さらには、両方の補文を従えていた動詞が、to 不定詞補文のみを従えるようになったという例もある。

このような事実から本発表では、英語話者には動詞と補文との間に何らかのスキーマが備わっており、それに従って補文選択が行われているのではないかという事を仮定し、そのスキーマがどういったものであるかを考察する事によって、動詞と補文との間の規則性を検討する。

上記の観点から to 不定詞の to は、'path' としての機能を果たし、話者或いは主節主語の心的態度の表れ、つまり conceptual distance の表れであり、補文の内容を示すイベントは、全体として喚起されるのではないかと考えられる一方、動名詞補文は、話者或いは主節主語との関係が密接で直接的関係を示し、補文の内容を示すイベントは、そのイベント内のある特定部分が時間的幅を伴い喚起されているのではないかという事が予測される。

このような予測に基づいて、動詞と補文との関係について英語話者が備えていると考えられるスキーマがどういったものであるのかを考察し、動詞と補文の間にある規則性を導き出す事を試みる。さらにそれぞれの異なる補文に従える同義語を観察する事によって、本稿で仮定しているスキーマの妥当性を検討する。

このような知見から大学の文法教育における「英語感覚の習得」に貢献できるのではないかと考える。

#### 参考文献

Bolinger, D. (1997). *Meaning and Form*. London: Longman.

Declerck, R. (1991). *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.

### <研究発表>「二重目的語構文における目的語の目的語性(Objecthood)と構文の関係について」

松元 豊子

いわゆる二重目的語構文と与格構文に現れる動詞は、大きく3つのグループに分けられる： 両方の構文に現れるもの(give など) 与格構文にのみ現れるもの(donate など) 二重目的語構文にのみ現れるもの(envy など)。

二重目的語構文をとれる動詞の制約については、様々な研究がなされている。語源および形態的・音韻的制約もそのひとつで、Green(1974)はじめ多くの研究者によって様々な仮説が提示されているがどれも決定的なものはいえない。意味の分類についても Green(1974), Wierzbicka(1988), Pinker(1989)などの研究があるが、意見の分かれる点多々見受けられる。

第1グループの動詞は、形態的にはOEに近いが大半の語源はラテン語、古期フランス語でいわゆる Latinate Hypothesis の反例となる。また、外見的にはSVOOという形をもちながら、意味的には典型的な二重目的語構文の持つ移動・所有の意味とはかなり異なっている。その違いの根本には動詞と目的語との関係(Transitivity/Objecthood)における特異性が認められる。

本発表では、Levin & Rappaport(2002)に基づきいわゆるプロトタイプカルな二重目的語構文を概観し、この第1グループの動詞を含む文と構造的、意味的比較を試みる。また Hopper & Thompson(1980)の Transitivity Scale(二重目的語構文に対応するよう一部変更)に基づいて他動詞性(transitivity)を検証し 第2グループの動詞との違いを数値で示すとともに、この違いが意味と構文にどのように反映されているのか分析を試みたい。また、この研究を、二重目的語構文と与格構文の意味および各構文に用いられる動詞について生徒にわかりやすく説明する際の手がかりとして利用できるようにしたいと考えている。

#### 参考文献

Green, G. (1974). *Semantics and Syntactic Regularity*. Bloomington, Ind.:Indiana University Press.

Hopper, P. and Thompson, S. (1980). Transitivity in grammar and discourse. *language* Vol.56. Nov.2

Levin, B. (1999). Objecthood: An event structure perspective. *CLS* 35, volume 1: The Main Session.

Levin, B., and Rappaport, H. (2002). What Alternate in the Dative alternation? Two approaches to the

lexical underpinning of dative alternation. The 2002 Conference on Role and Reference Grammar: New Topics in Functional Linguistics: The Cognitive and Discursive Dimension of Morphology, Syntax and Semantics, Universidad de La Rioja, Logorno, Spain, July 27-28, 2002.

Levin, B. (1993). *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago: University of Chicago Press.

Pinker, S. (1989). *Learnability and Cognition*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

Wierzbicka, A. (1988). *The Semantics of Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

## <研究発表>「従属節における時制の一致とその例外」

岩橋 一樹

時制の一致は、Costa(1972)によると、主節の動詞が非叙実動詞であれば義務的に起こる。一方、Riddle(1978)によると、主節が過去時制となる文で現在時制が従属節に生じると、主節の主語名詞句の指示対象や話者が、従属節で述べられている人や場所と、発話時において密接な関係があることが伝達される。ところが実際には、次の例のように、主節において非叙実動詞 *think* が過去時制で生じているが、従属節内が現在時制になることがある。

(1) *I thought that's what you said.*

さらに、Riddle(1978)によると、主節の主語名詞句の指示対象と補文の主語との間に見られる関係は語用論的なものであるが、両者の関係や、主節の主語名詞句の指示対象と従属節の内容との間の関係は、主節に生じる動詞句の意味からもわかる。そのうえ、次の例を見ればわかるように、主節の動詞句の意味に基づいて、従属節の時制が決まるといえる。

(2) *She wished that she (\*has/had) one of the dogs with her.*

(3) In a speech to parliament on June 22, Moldovan President Mirca Snegur *declared* that we (are/were) at war with Russia.

そこで本研究では、主節の動詞句により述べられる行為が何の根拠にも基づかない場合には、(2)のように時制の一致が必ず起こるが、主節の動詞句により述べられる行為が何らかの根拠に基づいている場合には、(3)のように時制の一致が随意的に起きることを示す。

## 参考文献

Costa, R. (1972) "Sequence of Tenses in That-Clauses," *CLS* 8, 41-51.

Riddle, E. M. (1978) *Sequence of Tenses in English*. Ph. D. dissertation. University of Illinois.

## 発表 第二部

### <実践報告>「EXTENSIVE READING を通して高校生の英語の READING に対する MOTIVATION を高める」

畠中 加代子

## 目的

low proficiency level の生徒達に extensive reading を通して未経験の reading skill を学ばせ楽しみのために自分のペースで、できるだけたくさんの本を読むことによって reading に対する不安を少なくさせ、自信を持たせる。その結果として英語の reading に対する motivation を高めたい。

## 背景

伝統的な訳読中心の intensive reading の skill だけでは、将来自立した英語の reading につながる可能性が少ない。特に intensive reading で落ちこぼれた生徒達は、reading に対して不安が大きく自信がない。知らない単語や構文にであっても文脈から推測したり、あるいは自分の経験から考察する skill を身につけることが大事である。彼らの proficiency level に応じた reading fluency

を経験することが、自信につながるからである。中学校の英語の5段階評価で1や2が大部分を占め、家庭での学習習慣をほとんど身につけていない生徒達を対象に、本来 class 外でおこなう extensive reading を授業のなかで実施した。

#### 仮説

- 1.extensive reading は、intensive reading よりも reading comprehension ability を向上させることに効果がある。
- 2.extensive reading を通して、楽しみのための reading を経験し、reading に対して motivation を高める。
- 3.extensive reading を通して、reading fluency を実感し reading に対して自信をつける。

#### 方法

3年生の reading class (31人クラスと22人クラス)を対象に31人クラスで extensive reading を、22人クラスで教科書を使って従来の intensive reading を実施した。約100冊の extensive reading 用のテキスト(100語レベルから300語レベル)を用意し、生徒達は、自分の読みたい本を好きなペースで一学期間読み続けた。最初に各自ゴール設定をし、一冊読み終わるごとにかかった時間や簡単なコメントを記録用紙に日本語で記入し、一週間ごとに提出させた。それを参考に中間期にインタビューをおこない、extensive reading についての感想や自分の読み方について気づいたことを話させた。extensive reading 実施前と実施後に reading の motivation や reading skill および reading 時の不安などに関するアンケートや comprehension test、cloze test、英検3級テストをそれぞれ2クラスで実施した。

#### 結果

集められたデータを統計的手法により分析し、仮説を検証し、今後の課題を検討したい。

### <研究発表> 「音読指導の実践と理論的考察 外国語学習での母語(カナ)表記の可能性と問題点」 真砂 薫

最近の大学教育でも実践的英語能力としてリスニング力の向上がもてられている。しかしリスニングの訓練を大学英語で初めて受ける学生も多い。さらに大学在学中にリスニングを含めた4技能がTOEIC, TOEFLなどで試されることもある。今回の発表の目的は第1には、4技能の基礎訓練として音読が重要であるとして、それを実践するために必要な聴解能力と発音力にどのような関連と問題があるのかを検討することである。第2には、「聞こえないから発音できない」「発音できないから聞き取れない」という循環を解消するための提案(試案)を検討したい。

具体的な検討方法は次の通りである。まず大学における音読や L.P.A.の読めなさも、音読能力の低下の一因とされるが、学習者の音声面の弱点が聴解や速読にも影響することを、アンケートやテストの結果から検討する。サンプル集団は近畿大学の基礎英語クラス(初級、TOEIC 380以下)、コミュニケーション1クラス(中級、TOEIC 430)、コミュニケーション3クラス(上級、TOEIC 470以上)各2クラス70名とした。また学習効果の測定基準としては TOEIC スコア以外にリスニングとディクテーションのプレテストとポストテストを使用した。

続いて、I.P.A.に代わる音声表記として母語によるカナ表記という方法を検討する。これは実践的側面による解決方法の試行である。これには授業実践中の答案事例の資料検討をそえたい。さらに外国語学習という観点から、母語による音声表記の意義をやや理論的に検討したい。

授業実践という場面では、調音音声学と聴覚音声学は完全に表裏一体にはならない。また生理音声学と知覚音声学の関係も同じである。聞けるから発音できるのか、発音できるからこそ聞き取れるのか。また母国語では無意識に習得できる聞き取りと発音の一体的習得を第2言語において、意識的習得においてはどのように行えばよいのか。特定音のフォニックス的訓練が重要に見えても、音声的変形の著しい語句、文単位の聴解に効果が薄いならば、その補助的方法として母語表記法も一考の余地があるのではないか。授業実践と調査からの所見は簡潔に言えば次の通りである。聴解力は英語能力を評価する上で重要な要素である。しかし例えば発音記号(I.P.A.)が読めることとリスニング、聴解能力との関連は深いとはいえない。また語彙力という場合、訳語の記憶と、聴解も関連性が疑わしい。ただしリスニングとその裏返しとしての自身の発音への関心の高さは、聴解能力の向上に、動機の面から関連が深いとみられる。

#### <研究発表>「『英語自己学習』に関する研究：『宿題』を視座に」

高橋 昌由

英語教育への関心が高まるにつれて、英語教育へのさまざまな要求は、強まるばかりである。では、われわれが望み、時代も要求する英語力はどのような場で伸長されているのだろうか。

その答えとして、まずは、教室での授業を挙げるべきであろう。また、授業実践の前提としてわれわれが依存している授業外の「自己学習」も挙げねばならない。つまり、英語学習は授業と自己学習の双方においてなされている活動である。

では、授業と自己学習について、その基礎となる研究は十分であろうか。授業に関してはさまざまな成果にわれわれは浴す状況にある。一方、授業外の自己学習については、十分な研究がなされているとは言い難い。よって、効果的な自己学習に関する方法論の構築が必要不可欠であると考え。さらに、学ば者に効果的な自己学習のあり方を示して、より高い英語力を身につけさせることができるように、次に述べる自己学習のフレームワークの研究が重要であると考え。

「自己学習」の定義は「教授者不在で授業時間外に、基本的には学習者のみで行われる英語学習」とする。そのフレームワークは、「定義」(前出)と「本質」と「自己学習成功の因子」から成る。「本質」は「学習者に提示する具体例」、「自己学習の型」、「自己学習と授業との関連」で構成する。また、「自己学習成功の因子」は、「成功した授業実践」、「学習者の自律」、「自己学習の効果的な『指示』または『提示』」、「教材開発」、「統合的教授」及び「評価」で構成する。

本発表においては、まず、前述の「自己学習のフレームワーク」を概説する。そして、その「本質」の「学習者に提示する具体例」のひとつである *Homework* に関して、さまざまな先行研究の日本での英語教授への応用とその可能性について、日本の高校生および教師を対象に実施した質問紙法による調査結果を中心に検討し、示唆を導き出したい。

## **<実践報告>「『持ち込み可』型テストの効用 一般英語の場合について」 山崎 清水**

本実践報告は、英語学力が比較的低い学習者に、「持ち込み可」型テストを実施することで、彼らの学習意欲を高める動機づけになるということを証明しようとするものである。

一般教養科目の一外国語として英語を学習している学生の学力はかなり低い。彼らの中には、中学・高校で学習しているはずの英単語や文法を理解出来ていない者も多く、テストで白紙を出す者も少なくない。このような学生の学習意欲を高める為に様々な工夫を試みた。本発表では、その中でも「持ち込み可」型テストの実施に焦点をあてて、そこで得た結果について報告する。

18歳の被験者100名を対象に、先ず診断の目的で「持ち込み不可」型テストを1回実施した。テストは既習範囲から、英文和訳、和文英訳、英問英答、日本語及び英語による要約等である。その結果、50点以上取った学生は100名中一人もいなかった上、平均点は20点台であった。そこで、ノートや辞書等の「持ち込み可」型テストを、既習範囲から4回実施することにした。テストの内容には、毎回必ず英問英答を入れた。他に、3回は和文英訳、1回は英文和訳、その他英語が日本語による要約を求めるもので、隔週毎に毎回50分のテストとした。第1回目の「持ち込み可」型テスト終了後から、学生たちの中に目立った改善が見られるようになった。出席率が上がり、積極的に質問もするようになった。テスト時には、辞書やノートを頼りに、全設問に解答するようになり、成績も伸びた。第4回目のテスト終了時に行ったアンケート調査では、学習に対して意欲的になったという意見が最も多かった。また、学生たちは英語の学習方法も確実に身につけていった。

さらに、これら「持ち込み可」型テスト実施の結果を、「持ち込み不可」型テストの結果と照合してみるとにより、「持ち込み可」型テストによって評価点を出すことは、学生の力を、概ね「妥当」に評価できることも判った。

## **<研究発表>「日本語コーパスを利用した和英辞典編纂に向けて」 森口 稔**

1987年に本格的にコーパスを利用した学習者向け英英辞典COBUILDが出版されて以来、英国の主要辞書出版社は相次いでコーパスの利用を開始した。また、日本でも、『ジーニアス』や『ウィズダム』などコーパスを利用した英和辞典が出版され始めている。しかし、英英辞典や英和辞典の編纂では、見出し語の選択、語義、コロケーション、用例などに英語のコーパスが利用される一方で、和英辞典の編纂に際して日本語のコーパス利用を謳っている例は、管見では皆無である。その理由は、和英辞典の編纂に日本語学からの視点が希薄であったためだけではなく、BNCやBank of Englishのような辞書編纂に利用できる大規模日本語コーパスが存在していないためであると考えられる。

日本語母語話者が英語を学習する道具の一つとして和英辞典を考えたとき、「英」だけではなく「和」の部分をもさらに充実させる必要があることはすでに指摘されている。本研究では、和英辞典編纂に日本語学からの視点を導入する一例として、日本語コーパスを利用した日本語コロケーション情報の先行研究を紹介し、その結論に基づいて既存の和英辞典がどの程度日本語のコロケーション情報を記載しているかを分析する。

たとえば、Terashima & Takizawa (in press)は、名古屋大学にある日本語コーパスを利用して、「いい」と「顔」が共起する頻度が高いことを指摘するとともに、「いい顔」に「をする」と「をしている」が後続した場合、単にアスペクトが違うだけではなく、意味的にも異なることに言及している。ところが、既存の学習和英辞典7冊を調べたところ、「いい顔をする」と「いい顔をしている」の双方を記載し、それらが意味的に異なるような英語訳を付加している辞書は皆無であった。

上述の点を踏まえ、和英辞典編纂には、英語研究者のみならず、日本語研究者の参加が不可欠であることと、辞書編纂に利用できる日本語コーパスと簡便なツールの開発が待望されることを結論として述べる。

#### 参考文献

Terashima, K., & Takizawa, N. (in press). Towards Compiling a Corpus-Based Dictionary of Japanese Collocations. In M. Murata, S. Yamada, and Y. Tono (Ed.), *Dictionaries and Language Learning: How can Dictionaries Help Human & Machine Learning?* Urayasu: The Asian Association for Lexicography.

#### <研究発表>「『オーラルコミュニケーション』教科書モデル会話文の分析」 釣井 千恵

本研究の目的は、教科書のモデル会話文が、話し言葉として自然なものであるかどうかを分析することである。「オーラルコミュニケーション」の授業で使用される教科書のモデル会話文を lexical density の観点から分析する。

ほぼすべての教科書で、モデルとしての会話文が各課に最低一つは載せられている。教室内・外で英語に触れる機会は増えているものの、多くの学習者にとって教科書の会話文は大変重要なものである。また、教室外で触れる英語は(たとえば、ニュースや映画など)ほとんどの高校生には難しすぎるもので、やはり彼らの英語学習に大きな影響を与えるのは教科書であるだろう。教科書のテキストはほとんどが2人(又は3人)による会話で、トピック・場面ともにインフォーマルなものである。しかし、教科書のテキストでは、実際に起こるインフォーマルな会話の特徴がどれほど反映されているのだろうか。

話し言葉と書き言葉には機能・媒体・形式など様々な違いがあり、さらに言語的にもそれぞれの特徴がある。言語的相違点の一つとして lexical density が挙げられる。

Lexical density とはテキストの中で使われている内容語(content words)の割合のことである。まず、テキストのすべての語数を数え、機能語(function words)を除いた語彙項目を数えて、パーセンテージで内容語の割合を表す。パーセンテージが高いほど、lexical density も高くなる。

分析したのは「オーラルコミュニケーション」で使用される検定教科書16点である。ほぼすべての教科書で共通して取り上げられている「方向をたずねる・教える」と「好き・嫌いについて述べる」会話に焦点をあてて分析した。

これらのテキストの lexical density は、31.6% から 55.1%であった。「方向をたずねる・教える」会話に関しては、13のデータのうち、10のテキストが44%以上、「好き・嫌いについて述べる」会話については、12のうち、11のテキストが44%以上であった。自然に起こる話し言葉(他の会話参加者からのフィードバックの可能性がある場合)の lexical density に関しては、Ure (1971) と Stubbs (1996) の研究から、44%以下であることが明らかにされている。分析の結果、



自然な会話と比べて、これらの教科書の会話文は、相手からのフィードバックのある会話であるにも関わらず、lexical density がかなり高いことがわかった。尚、英語教科書モデル文における lexical density が高いのには、いくつかの理由が考えられるが、これについて更にテキストを分析した結果、会話の exchange structure が関係していることがわかった。本発表では、lexical density の高いテキストと低いテキストにおける exchange structure を比較し、その特徴と問題点についても指摘する。

#### 参考文献

Ure, J. 1971. 'Lexical Density and Register Differentiation'. In G. Perren and J. L. M. Trim, (Eds.) *Applications of Linguistics*. Cambridge University Press : 443-52.  
Stubbs, M. 1996. *Text and Corpus Analysis*. Blackwell.

### <研究発表>「学習者の心理と英語の成績の相関関係について」

田村 学

#### 目的

学習者の様々な心理・行動と英語の成績について相関関係の有無を調べるためにこの研究は行われた。

#### 背景

自分が教えている中学 1 年生から 3 年生までの生徒がどのように考えているかを詳しく知ることが重要であった。

#### 仮説

英語に対する学習意欲・親の励まし・内的な動機づけ・外的な動機づけ・学習方法の得点が高いほど英語の成績は高く、英語を理解する際の不安が高いほど成績が低いのではないかという仮説が立てられた。

#### 方法

英語の成績を測る手段として財団法人日本英語検定協会が実施した平成 12 年度第 1 回 5 級の問題を使用した。これは中学 1 年生修了程度の学習者が受ける難易度のものである。受験後、学習者にアンケートを配布し自宅で記入してもらった。その後一人ずつ面接を行い内容について話し合った。アンケートの質問事項を作成する際に、Gardner (1985), MacIntyre & Gardner (1994), Schmidt et al. (1996) を参考にした。その中で必要と思われる 50 項目を選択し、学習者に適するように修正を加え日本語に翻訳した。質問に対してはほとんど当てはまらないから、ほぼ当てはまるまでの 4 段階で適当なものに印をつける方法を採用した。

#### 結論

調査対象者が少ないにもかかわらず、親の励まし・英語を理解する際の不安と英語の成績について有意の相関関係が得られた。不安の得点が高いほど英語の成績は下がる傾向にあった。これは、仮説と一致するものであった。ところが、親の励ましが大きいほど英語の成績が下がるという結果が得られた。これは、仮説と相反するものになった。親が励ますことが学習者に負担をかけているのかもしれない。今後親や教師がどのように子供と接していくべきか、慎重に検討されなければならない課題であるといえるのではないだろうか。他の要因に対しては明確な相関関係を見出すことはできなかった。

#### 参考文献

Gardner, R. C. (1985). *Social Psychology and Second Language Learning*. London: Edward Arnold.

- MacIntyre, P. D., & Gardner, R. C. (1994). The Subtle Effects of Anxiety on Language Processing. *Language Learning*, 44, 2, 283-285
- Schmidt, R., Boraie, D., & Kassabgy, O. (1996). Foreign Language motivation: Internal structure and external connections. In R. Oxford (Ed.), *Language learning motivation: Pathways to the new century* (Technical Report #11) (pp. 13-87). Honolulu: University of Hawaii.

**<研究発表>「ESL, EFL University Students の為の writing 指導の考察 動機付けの観点でみる Case Study 」** **川部 和世**

この研究発表は、米国州立大学の ESL で Academic short essay を勉強するフランス人大学生と日本の私立大学で同じく essay を学ぶ 2 人の大学生を対象に内的動機、外的動機の相互関係を根底に学習者の内発的動機を引き出す writing 指導法を考察し、その結果を発表するものである。本研究は Vallerand の提唱した内発的動機と外発的動機に基づいた Deci & Ryan の「自己決定理論」と Williams & Burden (1997) の “a social interactionist model” に着目して質的手法をとった。

研究方法は、米国の大学 ESL エッセイクラスにおいて 3 ヶ月間、TOEFL525 レベルのフランス人女学生に 30 分の個人面接 3 回、writing 資料、教師との面接 2 回、授業見学 2 回を考察した。日本の大学エッセイクラスで 4 ヶ月間、TOEIC 380 ~ 430 (TOEFL400 ~ 430) の 2 人の女子学生に 30 分の面接 4 回、writing の資料、教師との個人面接 1 回、授業見学 1 回を考察した。内 1 人については demotivation が見られ、授業を欠席し writing 資料も少なかった為、学生本人の希望で 2 年次の composition class のエッセイと担当教師との面接考察も行った。分析は、面接のテープ録音と授業見学の内容を書き起こし、外発的動機、内発的動機を示す箇所を抽出し、外発的動機によって内発的動機が強化されたかを考察した。

結果を、“A social interactionist model” (Williams & Burden, 1997) の観点で見ると、学習者が activity への内発的興味と、重要で意味のある第 3 者との相互的関わりをバランスよく保てる時に、内発的動機は外発的動機によって強化される事が明らかになった。教育的展望としては、リサーチで明らかになったいくつかの動機へのマイナス要因を取り除き、学生のレベルにあわせた方法で内発的動機を強化する指導方法を提示していきたい。

**参考文献**

- Deci E. L., & Ryan R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Vallerand, R. J. (1997). Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. *Advances in Experimental Social psychology*. 29, 271-360.
- Williams, M., & Burden, R. L. (1997). *Psychology for language teachers: a social constructivist approach*. Cambridge: Cambridge University Press.

**<研究発表>「成人英語学習動機 生涯学習としての英語 」** **沢田 美保子**

本研究の目的は、成人英語学習者の動機づけの動向を探ることである。外国語学習における動機づけの重要性はこれまでも多くの研究がなされている。ガードナーをはじめとする社会心理学の枠組みからのアプローチが主流であったが、90 年代に入りドーネイなど教育心理学的動機づけアプローチが盛んに行われている。日本における動機づけの研究も近年では久保(1997)や木村(1999)など教育心理学的動機づけ理論を背景に研究がなされている。しかし、これらの動機づけ研究は主に中、高、大学生を対象とし成人学習者についての報告は少ない。

現在、何千万人も成人学習者が自ら月謝を払い自発的に英語学校やカルチャーセンターで英語を学んでいる。資格取得、仕事上での必要性、海外旅行などその動機も多種多様と思われる。また、主婦や退職者、60代、70代の学習者などの学習動機はどうであろうか。生涯にわたる学習が必要とされつつある今日では、成人の学習についての研究が望まれている。

本研究では自由記述式による先行調査の結果を基に、32項目から成る質問紙を作成し、英語を専門としない大学生100人と英会話教室で英語を学習している20歳から80歳までの学習者160人を対象に生涯学習としての英語という視点から調査を行った。大学生、成人学習者のそれぞれの結果に因子分析を行い、各グループに4つずつの動機づけ因子が抽出された。成人学習者より動機づけがあいまいであると考えられた大学生の4因子の中には質問紙の文言に影響を受けたと思われる「外発的決意」、「外発的期待」の2因子が個別に確認され、成人学習者には「内発的・外発的な知識と興味」、「外発的・道具的」、「旅行と友達」の3因子に加え「加齢」という特徴的な因子が発見された。これらの結果を基に生涯学習の観点から成人英語学習者の動機の特徴について考察する。

#### 参考文献

Kubo, N. (1997). Motivation of university students in their study of English. *Japanese Journal of Education Psychology*, 45, 449-455.

木村祐三 (1999). 「外国語学習における動機付け」『鳴門英語研究』第12, 13号、鳴門教育大学 1-12.

## シンポジウム

### 英語教育と英和辞書：英和辞書を巡る最近の話題

コーディネーター：

南出 康世

英和学習辞典で最も重要なのはユーザーの視点である。しかし従来の辞書はユーザーの視点を覗いながら、その実は compiler perspective に基づいていたといっても過言ではない。『学習者コーパス』から見たユーザーの視点」は学習者にとって英和辞典のあるべき姿をさまざまな観点から明らかにするであろう。さて、今やコンピュータ・コーパスの時代である。「コーパスによれば」という言葉は千金の重みを持つに至った。しかし重要なのは結果としての数値それ自体でなく、それがどのようなコーパスから得られたかである。「頻度の信憑性：コンピュータ・コーパスの数値が語るもの」はデータの正しい読み方を提案してくれるだろう。

コミュニケーションのための英語が求められている。英和辞書はこれにどのように貢献できるであろうか。たとえば、間投詞は「アッ」「キャ」といった叫び声がすべてではない。多くは意図的に使われコミュニケーションで重要な役割を果たしている。「Interjection と Discourse Marker」が提案するように英和辞典も談話標識としての間投詞が持つコミュニケーション機能の重要性を学習者に意識させるべきであろう。さて辞書は引くものから押すものへ変貌しつつある。電子辞書の台頭である。「電子辞書は冊子体辞書と補完性をなす」とのんきなことをいっている時代ではなくなった。「学習者の視点から見た電子辞書の課題と『電子辞書指導』のあり方」は従来の辞書編集・教室の辞書指導に対する意識革命が必要なことを明らかにするだろう。

以下パネリストによって提示される「英和辞書に関わる諸問題」を会場のみなさまと共に考えてみたい。

### 1. 『学習者コーパス』から見たユーザーの視点」

投野 由紀夫

近年研究が活発になってきた英語学習者コーパスを利用した語彙習得研究の動向を紹介しながら、辞典情報にどのように有益な情報を提供できるかを考えてみたい。特に、学習者の必要とする語彙、英語に訳しにくい表現、コロケーションの誤り、動詞型の誤り、語彙選択の誤りなど、学習者コーパスならではの実証的なデータを英和辞典改訂に盛り込んでいく視点を一緒に考えたい。

### 2. 「頻度の信憑性：コンピュータ・コーパスの数値が語るもの」

橋本 喜代太

近年さまざまなコーパスを活用して語やフレーズの頻度を辞書編纂・教材作成・授業内容に盛り込むことが増えてきている。頻度情報の活用は確かに有益な面が多々あるが、その一方で、コーパスそのものの特徴を知らずに頻度だけを見ると誤った情報を信じてしまうことになりかねない。本発表では、複数のコーパス、また、口語・文語に切り分けたデータなどを利用して、頻度が示すことを適切に読み取るにはどうしたらよいかを考えてみたい。

### 3. 「Interjection と Discourse Marker」

西川 眞由美

従来パラ言語として扱われてきた interjection は、統語的に独立し、人の感情などを表す語であるという以外に言語研究の対象から外されてきた。しかしながら、interjection が人の伝達行動においてきわめて重要な役割を果たしているのは明らかである。意図明示的に使用した interjection を DM という視点からとらえ、発話者はただ感情を表すためだけに interjection を発するのではなく、politeness strategy 等、人の伝達と認知において重要なディバイスとして働き、その機能は英語学習者にとって必要不可欠なものであることを提示したい。

### 4. 「学習者の視点から見た電子辞書の課題と『電子辞書指導』のあり方」 関山 健治

学校教育現場における携帯型電子辞書（IC 辞書）の普及は目覚ましいものがあり、クラスのほぼ全員が電子辞書を使っていることも珍しくはない。電子辞書自体の機能や収録辞書も大きく進化し、毎月のように 各社が競って新製品を発表しているが、「いまどきの英語学習者」にとって最近の電子辞書はどのように映るのであろうか。本発表では、電子辞書に対する意識を学習者の視点から考察するとともに、高機能化、多コンテンツかが進んだ最近の電子辞書を有効に活用させるための「電子辞書指導」の可能性について提案したい。